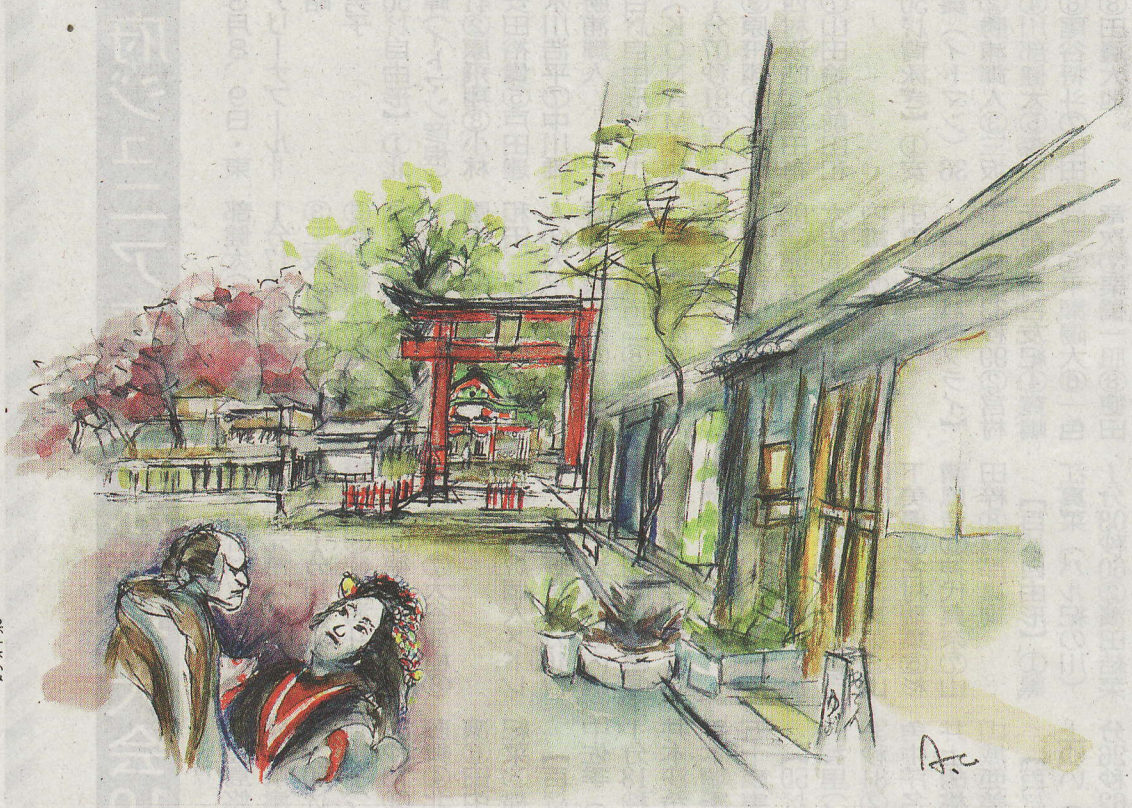


御霊神社の御堂筋

絵・文 熱田親憲



船場で生まれ育ち、「御訪ねた。取材にに応じてく村郷の産土神。そのルーでもある方からの提案されたのは園文夫宮司であツは、嘉祥3(850)年で、今日は御霊神社を西部に当たる旧摂津国津と、八十嶋祭の祭場を祭

った大阪湾入江の円江(現在の大阪市西区靱公園あたり)の円神祠だという。時が経ち、文禄3(1594)年に現在地の北船場へ移され、御霊神社となる。以降、昆布、鯉節をはじめとする海産物の日本一の集散地だった靱周辺の商人や船場商人の信仰と支持を集めるに至った。

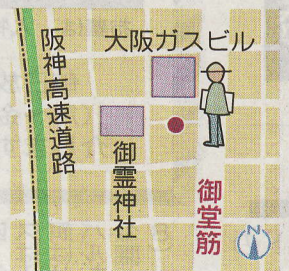
御霊神社の御堂筋の道路工事、地下鉄御堂筋線の敷設工事の時、いづれの着工時にも文夫宮司の祖父に当たる千秋氏がおはらいを担当されたという。

第二次世界大戦後は、米国が神社の旧跡地である楠永神社やその周辺の楠木を飛行場にするために撤去しようとした。ブ

ろ、中でまっ白な蛇がトグロを巻いてこちらを見ているという。昔から白蛇は神の使いといわれ、おとり、それを見た米軍関係者はひどく驚き、工事を取りやめた。そのおかげで楠永神社と楠の大

白蛇に米駐留軍も撤去中止

れた。特に御霊文楽座の境内の緑地化をすすめていた。御堂筋近辺にお勤めされている方々に「癒やしの空間」として椅子を並べ開放しておられる。また200名も収容できる舞台つき小ホールにもなる儀式殿は、文楽・落語・日舞・文化講演会などに無料提供している。文化活動や地域活性化につとめておられる姿に接し、なんともいえない温かいものを感じながら、境内を後にした。



木が今なお靱公園に残っていた。昭和10(1935)年、京都から嫁いで御霊神社の若奥さんになられた文夫宮司の母は、お正月・お祭りなどで、社務所の神職さんや巫女さんなどの食事準備やその装束の誂えに忙しかつたという。神社の奥さんは真にぎわいの核であり、その支えであったようだ。現在の園文夫宮司の代となり、またものにぎわいを取り戻すために、

ルドーザーを使って一気に撤去しようとしても機械が動かなくなり、またけが人も続出した。米国駐留軍の要請で文夫宮司の父の克己氏がおはらいすることになり、社殿の扉を開けたところ、中でまっ白な蛇がトグロを巻いてこちらを見ているという。昔から白蛇は神の使いといわれ、おとり、それを見た米軍関係者はひどく驚き、工事を取りやめた。そのおかげで楠永神社と楠の大

境内の緑地化をすすめていた。御堂筋近辺にお勤めされている方々に「癒やしの空間」として椅子を並べ開放しておられる。また200名も収容できる舞台つき小ホールにもなる儀式殿は、文楽・落語・日舞・文化講演会などに無料提供している。文化活動や地域活性化につとめておられる姿に接し、なんともいえない温かいものを感じながら、境内を後にした。